



Data 2023-81
監督・脚本: イ・ジョンジェ
出演: イ・ジョンジェ/チョン・ウソン/チョン・ヘジン/ホ・ソンテ/コ・ユンジョン/キム・ギョンス/チョン・マンシク

👁️👁️ みどころ

近時の日本は“純愛もの”や“お涙頂戴モノ”、そしてお手軽な“娯楽作品”ばかりだが、韓国では『イカゲーム』で大人気になった若手俳優イ・ジョンジェが初監督作品として、軍事独裁政権下にあった1980年代の韓国を舞台に、南北分断の悲劇と(南北の)二重スパイ問題に焦点を当てた超シリアスな問題提起作を発表!

米国のCIAやFBIは、ロシアのKGBと共に誰もが知っているが、韓国のKCIA(大韓民国中央情報部)も有名。その一因は、1973年8月8日に発生した金大中拉致事件だが、あなたは1980年5月の光州事件を知ってる?その弾圧ぶりと、その後の軍事独裁政権の横暴ぶりを知ってる?イ・ジョンジェ自身と、『私の頭の中の消しゴム』(04年)等で有名なチョン・ウソンが、KCIAの海外班と国内班の責任者としてW主演した本作は、しっかり勉強しなければ理解できないほどシリアスな二重スパイ合戦になっている。

暗号名“トンニム”は誰だ?それを巡って2人の主役は大統領暗殺を狙う北朝鮮のスパイと対峙するが、その展開と結末は?舞台はワシントン、東京を経て、ラストはタイのバンコク。そこでの大統領の警護は2人の任務だが、さて大統領の安否は?そしてまた、本作ラストに見る男の美学とは?若手俳優イ・ジョンジェの問題意識の卓越さと本作の出来に拍手!

■韓国俳優が韓国特有のチョー深刻な問題提起作を!■

韓国では、近時Netflixでシリーズ配信されている韓国のサバイバルドラマ『イカゲーム』が大ヒットしているようだ。そのおかげで、主演のイ・ジョンジェも大人気らしいが、その勢いの中、俳優イ・ジョンジェの監督初作品として登場したのが本作。彼が『私の頭の

中の消しゴム』(04年)『シネマ9』137頁)等で有名なチョン・ウソンとW主演した本作は、娯楽作に徹したドラマ『イカゲーム』とは全く異質の、韓国特有の超深刻な問題提起作だ。

1945年の終戦から今日まで78年間の平和を享受してきた日本と異なり、朝鮮戦争によって北と南に分断された朝鮮半島は大変。貧困に喘ぐ北はもとより、民主化された韓国だって順調に民主化と近代化が進み、豊かになってきたわけではなく、台湾と同じように大変な“暗黒時代”も体験した。その代表が『光州5・18』(07年)『シネマ19』78頁)等で有名な、1980年5月18日～27日の“光州事件”だが、その後軍事独裁政治色を強めていった韓国では、南北スパイ問題(統一問題)や韓国内に設置されたKCIA(大韓民国中央情報部)のあり方、さらにKCIA内部での、あるいはKCIAと例えば統一戦線部など他の部署との権限、縄張り争い等がチョー深刻な問題となった。1980年代の日本では株高が進み、バブル経済が進行した。1979年に独立して弁護士事務所を持った私は、仕事はもちろん毎晩深夜までの北新地通いとカラオケの熱唱に明け暮れていたが、さて韓国では・・・?

本作は韓国政治特有の南北(スパイ)問題とKCIAの暗躍に焦点を当てた深刻な問題提起作だから、本作を鑑賞するには最初からその覚悟と勉強の意欲を持つことが不可欠だ。

■□■訪米中の韓国大統領暗殺計画が！導入部の迫力に驚愕！■□■

米国のCIAやFBIは世界的に有名だし、旧ソ連やロシアのKGB(国家保安委員会)もプーチン大統領の出身母体として世界的に有名。しかし、KCIAも、米ロに比べれば弱小国に過ぎない韓国の情報組織ながら、世界的に有名だ。その理由の1つは、『KT』(02年)『シネマ2』211頁)で明らかのように、1973年8月8日に日本で発生した、当時は野党の党首で、後に大統領となる金大中氏の拉致軟禁事件のためだが、本作冒頭では、光州事件後しばらくして米国を訪問した韓国大統領に対して、盛り上がる在米韓国人による抗議デモだけでなく、何と大統領暗殺計画が登場し、韓国映画特有のド派手な銃撃事件が登場するので、その迫力にビックリ!

本作からはKCIAの組織全貌はわからないが、本作では、KCIAは架空の名前である“国家安全企画部”とされている。そして、大きな部屋の中でふんぞり返っている、アジア局長を兼ねた部長の下で、実務の責任を担っている、①海外部の責任者であるパク・ピョンホ次長(イ・ジョンジェ)と②国内部の責任者であるキム・ジョンド次長(チョン・ウソン)の2人がW主演で登場するので、それに注目!大統領が襲われ、一大銃撃事件に至ったのは、海外部のパク次長の責任だと厳しく追及されたのは当然だが、そもそもなぜ韓国大統領の訪米計画の日程詳細がテロリストたちにバレていたの?また、このテロリストたちは北朝鮮のスパイ(実力部隊)らしいが、それはKCIAの内部に内通者(二重スパイ=もぐら)がいたためでは?

なるほど、なるほど、これが1980年代の民主化の動きを抑圧し、軍事独裁政権色を

強めていった韓国の“政情不安”に乗じた、韓国（映画）特有の南北スパイ問題なの。こりゃ面白そう。しかして、あなたの1980年代の韓国政治についてのお勉強は大夫・・・？

■□■学生運動の盛り上がりは？韓国の樺美智子（？）に注目■□■

日本では1960年代後半に、私も参加した学生運動が盛り上がったが、1980年代の韓国に見る、軍事独裁政権に反対し、民主化を求める学生運動の盛り上がりもすごい。光州事件への弾圧と収束にもかかわらず、大統領退陣を求める学生運動が盛り上がってくるのが鬱陶しい軍事独裁政権は、大学内に機動隊を導入するなどしてこれを弾圧したが、本作には、そこで日本の1960年の旧安保条約反対闘争の国会突入学生デモで死亡し、国民的英雄に祀り上げられた東大生の樺美智子さんのような、可憐な1人の女子学生チヨ・ユジョン（コ・ユンジョン）が登場してくるので、それに注目！

ユジョンはデモ隊に参加していたわけではなく、閉じ込められていたデモ隊を解放するべく門の鍵を開けたただけだが、それって一体どれほどの意味が？

■□■トンニムは誰だ！KCIA 内部の疑心暗鬼の広がりとは？■□■

“閣下”の訪米計画が事前に北に漏れ、また、“417特殊部隊”や“亡命作戦”が失敗したのは、KCIAのアジア局長で部長でもあった前任者が、私腹を肥やし任務を怠っていたためらしい。パク次長の告発によって辞任を余儀なくされたそんな前部長に対して、“閣下”が新たに部長に任命した前秘書室長だった男は、前任者とは正反対の任務に忠実、そして、北のスパイ摘発にやる気満々だ。そのため、学生運動の活動家たちは次々と逮捕され、次々と「お前が北のスパイだろう！自白しろ！」と拷問にかけられた上、ユジョンもその中に入ってしまったから、さあ大変だ。

ユジョンは後の回想シーンの中で、パク次長と共に東京で活動していたヤン課長の娘で、ヤン課長が死亡した責任を取ったパク次長が、その後ずっと面倒を見ていたことが判明するが、コトはそう簡単ではない。パク次長自身が“二重スパイ（＝もぐら）炙り出し作戦”の当事者として大変な目に遭っていく中、このユジョンも逮捕され、拷問され、ハラダ・ヒトミなる日本名で活動していた北のスパイで、彼女こそが暗号名“トンニム”なるスパイだったという汚名まで着せられていくことになるから、この後に展開していく複雑なストーリーをしっかりと読み解きたい。

何としても暗号名“トンニム”と呼ばれている二重スパイ（＝もぐら）を炙り出さなければならない新部長は、一方ではパク次長に、キム次長率いる国内部チーム全体の調査を、他方ではキム次長に、パク次長率いる海外部全体の調査を命じたから、互いにチームの存続と名誉を懸けて、もぐらを探り出そうとする KCIA 内部の疑心暗鬼状態がどんどん拡大していくことに。さあ“トンニム”は誰だ！

■□■北朝鮮の工作員（スパイ）の暗躍は？■□■

韓国映画には『ブラザーフード』（04年）『シネマ4』（207頁）等の朝鮮戦争をテー

マにした名作と、『シュリ』（99年）、『JSA』（00年）（『シネマ1』62頁）、『二重スパイ』（03年）（『シネマ3』74頁）等の南北分断の悲劇をテーマにした名作があるが、本作はそれらの系譜を承継するものだ。

もっとも、本作ではKCIAの海外と国内の責任者という2人の男をW主演としているため、北朝鮮の工作員（スパイ）が表舞台で暗躍するシーンは少ない。しかし、それでも、クリーニング店をアジトとして、怪しげな行動をとる怪しげな男は、これぞ北朝鮮の工作員！？KCIAの調査では、そんな北の工作員は暗号名“トンニム”と呼ばれており、その男の解明が目下最大の任務だが、その追及は・・・？とりあえず、怪しげな男を連行し拷問して自白させるのも1つの手だが、それで本当に韓国の大統領暗殺という北の壮大な企みを阻止できるの？

近時の子供騙しのような邦画では絶対見ることのできない、ホンモノの情報戦とホンモノの（二重）スパイ合戦の迫力と醍醐味をしっかりと確認すると共に、いつ韓国の大統領暗殺や韓国への軍事侵犯が起きてもおかしくないリアル感を、本作中盤でしっかりと味わいたい。

■□■舞台は東京へも！その回想シーンでは一体ナニが？■□■

中国で大ヒットした若者向けの人気シリーズが、『唐人街探偵』シリーズ。同作はタイトル通り、探偵モノ、推理モノだが、そのシリーズ第3作たる『唐人街探偵 東京MISSION』（21年）（『シネマ49』255頁）の舞台は、タイトル通り東京だった。同作では、ランキングナンバー3の日本人探偵の野田（妻夫木聡）とヤクザの親分・渡辺（三浦友和）が大活躍していたが、本作も中盤の舞台は東京になるので、それに注目！

もっとも、それはパク次長の回想シーンとして登場し、そこではパク次長の部下であるヤン課長がパク次長の指示ではなく本部の指示に従ったために、大きな混乱が生じるストーリーが描かれる。そこでキーワードになるのが“417特殊部隊”や“亡命作戦”等々、北朝鮮が仕掛けてくるさまざまなミッションと、これらの北の暗躍に対するKCIAの対抗策だが、その知能戦はどちらが勝っているの？スパイ合戦は、日本の戦国時代における“忍びの者”の活躍や『007』シリーズにおけるジェームズ・ボンドの活躍と同じように、最終的に情報の優劣によって決まるが、北朝鮮vsKCIAの情報合戦は大変。そして、“二重スパイ”はその熾烈な情報合戦の中で更なる不確定要素を作り出すから、更に大変だ。

本作中盤では、東京を舞台として展開する、そんな北朝鮮工作員（スパイ）たちの暗躍と、それに対するKCIAの対抗ぶりの中で、パク次長とキム次長が見せるそれぞれの活躍をしっかりと確認したい。

■□■最後の舞台はタイのバンコク。ここで大統領が暗殺？■□■

韓国の現在の大統領は、2022年5月の選挙で文在寅（ムン・ジェイン）を破って当選した保守党の尹錫悦（ユン・ソンニョル）。今は野党になってしまったムン・ジェイン大統領時代の日韓関係は最悪だったが、ユン・ソンニョル大統領が対日関係の改善方針を明

確にした後の日韓関係は良好になっている。また、米韓関係も良好となり、大規模な軍事演習も実施している。しかし、軍事独裁政権下にあった1980年代の韓国では、私の記憶では、韓国大統領の世界訪問はそんなに多くなかったはずだ。

ところが、本作では冒頭の訪米、中盤の訪日があり、さらにラストではタイのバンコクを訪問する設定になっているので、それに注目！しかし、冒頭から大統領暗殺計画が決行され、大統領の命が危うくなっているのに、北のスパイ＝トンニムの全貌が未解明のままでのタイ訪問は大丈夫なの？そんな心配の中、ピョンホとジョンドたちが警備する会談場に大統領を乗せた車が入ってくることに・・・。

そんなラストシーンを迎えるにあたっての最大のポイントは、ストーリー展開の中で、この時点では概ね観客に“トンニム”(＝北のスパイ)は誰だ！の解明ができてきていることだ。もちろん、それは意外な人物なのだが、なるほど、さもありなん！なるほど、なるほど・・・。人気俳優イ・ジョンジェが初監督を務めた本作は、実によくできた脚本になっている。

本作中盤では“トンニム”が完全にでっち上げられていたが、ラストに向けては“トンニム”の真相がおぼろげながら明らかにされてくるため、会談場近くにライフルを持って隠れている北朝鮮の狙撃兵らの配置にも十分納得できる。もとより、韓国大統領(側)だってバカではないから、それなりの厳重かつ万全の警備体制を敷いているはずだが、さて車が到着し大統領が降り立つと・・・？ハリウッド映画『エンド・オブ・ホワイトハウス』(13年)『シネマ31』156頁)では、シークレットサービスの男が主演として八面六臂の大活躍をしていたが、本作ラストの、タイのバンコクを舞台とした韓国大統領の運命はあなた自身の目でしっかりと！

■□■韓国の二重スパイ映画に見る、“男の美学”とは■□■

『007』シリーズはシリアスなスパイものというよりは娯楽アクション大作の面が強くなっているが、本来のスパイ映画はシリアスなもの。かつて市川雷蔵が主演した『陸軍中野学校』シリーズはシリアスだったが、それと同じように韓国の二重スパイものはシリアスなものだ。しかして、ド派手な銃撃戦を至るところに散りばめている本作最後の、タイのバンコクにおける韓国大統領襲撃を巡る銃撃戦も、ハリウッド映画に負けないほどのド迫力と面白さがある。その結果、大統領が死亡したのか否かは私の口からは言えないが、本作ラストで味わいたいのは、韓国の二重スパイものに見る男の美学だ。高倉健や鶴田浩二が主演する日本のヤクザ映画では、堪忍袋の緒が切れて1人敵地に乗り込み、復讐を果たした主人公が、静かに刑務所に自主する形で男の美学を貫くのが定番だが、さて KCIA の海外部の責任者と国内部の責任者としてライバル関係にあったパク次長とキム次長に見る“男の美学”とは？KCIA の男にとって、仕事は命。それは本作冒頭からひしひしと伝わってくるが、その命よりも更に大切なものが、男の美学だ。しかして、本作ラストに見る“男の美学”についてはあなた自身の目でしっかりと。

2023(令和5)年7月10日記

